

# 近隣の地域コミュニティに対する評価が 住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響

## 東京都心と近郊を結ぶ鉄道駅周辺地域の調査

赤堀 渉<sup>†</sup> 横山 実紀<sup>†</sup> 村田 藍子<sup>††</sup> 渡邊 淳司<sup>†,††</sup>

<sup>†</sup> NTT 社会情報研究所 〒239-0847 神奈川県横須賀市光の丘 1-1

<sup>††</sup> NTT コミュニケーション科学基礎研究所 〒243-0198 神奈川県厚木市森の里宮宮 3-1

E-mail: †{wataru.akahori.cd,miki.yokoyama.ry,aiko.murata.kb,junji.watanabe.sp}@hco.ntt.co.jp

**あらまし** 自分の住んでいる地域コミュニティに対する評価は、住民個人のウェルビーイングと深い関わりがあると考えられる。しかし、先行研究では、個人レベルのこれらの関係性について、ほとんど研究がなされていない。そこで、本研究では、近隣の地域コミュニティに対する評価が、住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。本研究は、東京都心と近郊を結ぶ3路線の74駅を最寄駅とする住民13174名を対象に、Webアンケート調査を実施した。データ収集は、近隣の地域コミュニティに対する評価の指標として Neighbourhood Thriving Scale を、住民個人のウェルビーイングの指標として PERMA Profiler を使用した。本稿では、住民個人のウェルビーイングを従属変数、近隣の地域コミュニティに対する評価を独立変数とする重回帰分析の結果を報告する。

**キーワード** 近隣の地域コミュニティ、ウェルビーイング、鉄道駅

## 1 はじめに

世界保健機関 (WHO) は 1948 年に、社会的ウェルビーイング (Social well-being) を個人の健康全般に関する側面の 1 つとして位置づけた [1]。その後、Keyes は、社会的ウェルビーイングを“他者、近隣、コミュニティとの関係の質に関する個人の自己報告”と定義している [2]。近年では、気候変動やパンデミックなどの社会環境の課題が頻繁に発生しており、世界中の地域コミュニティがこれらの課題に対処する必要性が高まってきている。このとき、社会的ウェルビーイングは、地域コミュニティの危機から回復する能力を評価するための重要な指標となる可能性がある [3]。

一方、地域コミュニティとの関連性を考慮した社会的ウェルビーイングを測定するための尺度は少なく [3]、その尺度を用いた報告事例も少ない。日本国内では、地域の資本 (例えば、物的資本、社会関係資本) が、住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響が数多く調査されている [4]。例えば、Kunimitsu は、住民の満足度には地域差があり、その差は社会関係資本や外部の人からの地域に対する評判によって強く影響を受けることを示している [5]。また、田中らは、地域を中心部・近郊部・山間部に類型し、物的資本が中心部と近郊部で、社会関係資本が中心部と山間部で、住民の満足度と有意な関係があることを示している [6]。社会的ウェルビーイングは、地域の資本と関連する概念であるが、資本に対する住民の主観評価に焦点が当てられる点で異なるため、社会的ウェルビーイングが住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響はほとんど明らかにされていない。

社会的ウェルビーイングと住民個人のウェルビーイングとの

関係を調査した数少ない研究の 1 つに、宗と新井による研究 [7] がある。宗と新井は、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県在住の 12608 名を対象に Web アンケート調査を実施し、社会的ウェルビーイング (具体的には、主観的地域満足度) が住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響を調査した。その結果、社会的ウェルビーイングが住民個人のウェルビーイングに正に影響することが示唆されている。また、社会的ウェルビーイングは、地域に対する親しみやすさ、治安の良さ、交通の利便性、綺麗な街並みの項目から強く影響を受けていた。しかし、社会的ウェルビーイングや住民個人のウェルビーイングは、回答者自身が感じている幸福度を 10 点満点で回答したものであり、構成概念の信頼性や妥当性が検証された心理尺度を用いていない。そのため、回答者のウェルビーイングの構成概念が、人それぞれ異なっていた可能性がある。そこで本研究では、既存の心理尺度を用いて、社会的ウェルビーイング (具体的には、近隣の地域コミュニティに対する評価) が、住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

## 2 方法

### 2.1 参加者・手続き

本調査は、東京都心と近郊を結ぶ 3 路線 74 駅の周辺地域に居住する住民を対象として、2022 年 3 月 4 日から 13 日に Web アンケート調査を実施した。本調査は、株式会社アスマークによって実施され、アンケートパネルに登録するモニタにオンラインで募集し、13174 名が参加した (表 1)。参加者には、本調査の目的、概要、取得データの利用範囲等について説明する文章が提示され、同意した者のみがアンケートに回答した。アン

表 1 参加者の属性

属性	項目	度数	割合 (%)
性別	男性	7474	56.7
	女性	5610	42.6
	その他	43	0.3
	回答拒否	47	0.4
年齢	19 歳以下	515	3.1
	20-29 歳	1631	12.4
	30-39 歳	2192	16.6
	40-49 歳	2676	20.3
	50-59 歳	3146	23.4
	60-69 歳	2050	15.6
	70-79 歳	833	6.3
	80 歳以上	100	0.8
	回答拒否	31	0.2
婚姻状況	未婚	4660	35.4
	既婚	7754	58.9
	離死別	760	5.8
世帯人数	1 人	3012	22.9
	2 人	4023	30.5
	3 人	3282	24.9
	4 人	2396	18.2
	5 人以上	461	3.5
居住年数	1 年未満	650	4.9
	1-5 年	2229	16.9
	5-10 年	1952	14.8
	10-15 年	1854	14.1
	15-20 年	1642	12.5
	20-25 年	1528	11.6
	25-30 年	960	7.3
30 年以上	2359	17.9	

ケート回答終了後、参加者に対して、報酬として規定の謝礼が支払われた。

## 2.2 質問項目

本研究では、社会的ウェルビーイングが、住民個人のウェルビーイングに及ぼす影響を調査するため、従属変数として住民個人のウェルビーイングを、統制変数として参加者の属性（性別、年齢、婚姻状況、世帯人数、居住年数）を、独立変数として社会的ウェルビーイングを測定した。

**住民個人のウェルビーイング：**住民個人のウェルビーイングの指標として、PERMA Profiler [8] を使用した。これは、Seligman が提唱した 5 要因（Positive emotion, Engagement, Relationship, Meaning, Accomplishment）で構成されるモデル [9] を測定するための尺度であり、国際的かつ大規模なサンプルを用いて、その尺度の信頼性と妥当性が検証されている [8]。本研究では、PERMA Profiler の Overall well-being の得点を従属変数として使用する。尺度の信頼性を表すクロンバックの  $\alpha$  係数は、0.96 であった。

**社会的ウェルビーイング：**社会的ウェルビーイングの指標

として、Neighbourhood Thriving Scale [3] を使用した。これは、社会的ウェルビーイングを測定する尺度の 1 つであり、近隣の地域コミュニティに対する個人的な感情や対人関係の特徴を評価する 57 の質問項目で構成される。本尺度の下位概念は、1: Collective positive effort, 2: Participation, 3: Celebration, 4: Social network pathways, 5: Optimism about the community, 6: Social cohesion, 7: Engagement pathways, 8: Safety, 9: Autonomous citizenship, 10: Positive regard, 11: Low resilience で、クロンバックの  $\alpha$  係数は、それぞれ、1: 0.86, 2: 0.76, 3: 0.82, 4: 0.82, 5: 0.40, 6: 0.55, 7: 0.71, 8: 0.68, 9: 0.60, 10: 0.69, 11: 0.52 であった。本研究では、クロンバックの  $\alpha$  係数が 0.7 以上という基準から、Collective positive effort (CPE), Celebration (Cel), Participation (Par), Social network pathways (SNP), Engagement pathways (EP) を独立変数として使用する。

## 3 結果

住民個人のウェルビーイングが、社会的ウェルビーイングに応じて変化するかどうかを調べるため、性別、年齢、婚姻状況、世帯人数、居住年数、社会的ウェルビーイングの変数を用いて、ウェルビーイングを説明する重回帰モデルで評価した（表 2）。

その結果、属性について、性別、年齢、婚姻状況、世帯人数、居住年数の変数が、住民個人のウェルビーイングと有意な関係がみられた。まず、男性と比べて女性の方が、ウェルビーイングが高かった ( $\beta = 0.07, SE = 0.03, t = 2.62, p < .01$ )。次に、19 歳以下の人と比べて 30-39 歳、40-49 歳、50-59 歳、60-69 歳の人の方が、ウェルビーイングが低かった ( $\beta = -0.29, SE = 0.08, t = -3.84, p < .001; \beta = -0.46, SE = 0.08, t = -6.08, p < .001; \beta = -0.46, SE = 0.08, t = -5.86, p < .001; \beta = -0.29, SE = 0.09, t = -3.35, p < .001$ )。また、未婚者と比べて既婚者、離死別者の方が、ウェルビーイングが高かった ( $\beta = 0.34, SE = 0.04, t = 8.47, p < .001; \beta = 0.14, SE = 0.06, t = 2.42, p < .05$ )。さらに、1 人暮らしの人と比べて 2 人暮らしの人の方が、ウェルビーイングが高かった ( $\beta = 0.10, SE = 0.06, t = 2.42, p < .05$ )。そして、居住年数が 1 年未満の人と比べて 20-25 年、30 年以上の人の方が、ウェルビーイングが低かった ( $\beta = -0.21, SE = 0.07, t = -3.00, p < .01; \beta = -0.19, SE = 0.07, t = -2.83, p < .01$ )。

また、属性に加えて、社会的ウェルビーイングの変数が、住民個人のウェルビーイングと有意な関係がみられた。具体的には、CPE, Cel, SNP, EP が高い人ほど、ウェルビーイングが高かった ( $\beta = 0.44, SE = 0.04, t = 10.07, p < .001; \beta = 0.44, SE = 0.04, t = 11.08, p < .001; \beta = 0.55, SE = 0.03, t = 15.98, p < .001; \beta = 0.27, SE = 0.03, t = 8.27, p < .001$ )。一方、Par が高い人ほど、ウェルビーイングが低かった ( $\beta = -0.19, SE = 0.02, t = -10.08, p < .001$ )。

## 4 考察

本研究では、住民個人のウェルビーイングを従属変数、個人

表2 重回帰分析の結果

変数	項目(幅)	推定値	標準誤差	95%信頼区間
(切片)		2.20	0.11	[1.98, 2.42]
性別	女性	0.07	0.03	[0.02, 0.12]
	その他	-0.13	0.21	[-0.55, 0.29]
	回答拒否	-0.18	0.24	[-0.66, 0.30]
年齢	20-29 歳	0.01	0.07	[-0.13, 0.16]
	30-39 歳	-0.29	0.08	[-0.44, -0.14]
	40-49 歳	-0.46	0.08	[-0.61, -0.31]
	50-59 歳	-0.46	0.08	[-0.62, -0.31]
	60-69 歳	-0.29	0.09	[-0.46, -0.12]
	70-79 歳	-0.05	0.10	[-0.24, 0.14]
	80 歳以上	0.01	0.16	[-0.31, 0.33]
	回答拒否	-0.61	0.31	[-1.22, -0.01]
婚姻状況	既婚	0.34	0.04	[0.26, 0.41]
	離死別	0.14	0.06	[0.03, 0.26]
世帯人数	2 人	0.10	0.04	[0.02, 0.19]
	3 人	0.04	0.04	[-0.05, 0.13]
	4 人	-0.01	0.05	[-0.10, 0.09]
	5 人以上	0.05	0.08	[-0.15, 0.15]
	回答拒否	-0.61	0.31	[-1.22, -0.01]
居住年数	1-5 年	0.05	0.06	[-0.07, 0.17]
	5-10 年	-0.04	0.06	[-0.17, 0.09]
	10-15 年	-0.07	0.07	[-0.20, 0.06]
	15-20 年	-0.13	0.07	[-0.26, 0.01]
	20-25 年	-0.21	0.07	[-0.34, -0.07]
	25-30 年	-0.10	0.07	[-0.25, 0.04]
	30 年以上	-0.19	0.07	[-0.32, -0.06]
	回答拒否	-0.61	0.31	[-1.22, -0.01]
CPE	(1-5)	0.44	0.04	[0.35, 0.53]
Par	(1-5)	-0.19	0.02	[-0.23, -0.15]
Cel	(1-5)	0.44	0.04	[0.36, 0.52]
SNP	(1-5)	0.55	0.03	[0.48, 0.61]
EP	(1-5)	0.27	0.03	[0.20, 0.33]
R2 値		0.28		
F 値		173.1		
サンプル数		13174		

注：性別は男性，年齢は 19 歳以下，婚姻状況は未婚，世帯人数は 1 人暮らし，居住年数は 1 年未満をそれぞれ参照属性としてダミー変数化している。

の属性を統制変数，社会的ウェルビーイングを独立変数とする重回帰分析を実施した。

まず，個人の属性について述べる。日本人を対象とした先行研究 [10] と同様に，性別（女性の方が男性よりもウェルビーイングが高い），年齢（U 字曲線），婚姻状況（既婚者の方が未婚者，離死別者よりもウェルビーイングが高い）の影響が見られた。また，内閣府の調査 [11] と同様に，単身世帯のウェルビーイングが低い結果であった。居住年数については，居住年数が 1 年未満の人の方が，居住年数が 20-25 年，30 年以上の人よりも，ウェルビーイングが高かった。先行研究 [7] では，社会的ウェルビーイングは居住年数と正の関係があることが示唆されているが，本研究では，個人のウェルビーイングについては居住年数と負の関係があることが示唆された。

次に，社会的ウェルビーイングについて述べる。先行研究 [7]

と同様に，社会的ウェルビーイングの下位概念の多くは，住民個人のウェルビーイングと正の関係が見られた。しかし，Participation のみ，住民個人のウェルビーイングと負の関係が見られた。つまり，地域コミュニティに積極的に参加している人ほど，ウェルビーイングが低いことが明らかになった。住民個人のウェルビーイングが地域参加と負の関係があることのメカニズムは，本調査の結果のみでは推測が困難であるため，今後詳細な調査が必要である。

## 5 結 論

本研究は，近隣の地域コミュニティに対する主観評価と，住民個人のウェルビーイングの関係を調査した。東京都心と近郊を結ぶ 3 路線の 74 駅を最寄駅とする住民 13174 名の自己報告に基づくデータを分析した結果，近隣の地域コミュニティに対する評価（Participation を除く）が，住民個人のウェルビーイングと正に関係することがわかった。本研究で得られた知見は，住宅政策や都市計画など，地域の発展の方向性を検討する上で，重要な要素となる可能性がある。今後の課題として，近隣の地域コミュニティに対する評価と，地域特性や地域に対する愛着との関係性について分析することが挙げられる。

## 文 献

- [1] World Health Organization. Basic documents, 2020.
- [2] Corey Lee M. Keyes. Social well-being. *Social Psychology Quarterly*, Vol. 61, No. 2, pp. 121-140, 1998.
- [3] Cathy Baldwin, Penny Vincent, Jamie Anderson, and Patrick Rawstorne. Measuring well-being: Trial of the neighbourhood thriving scale for social well-being among pro-social individuals. *International Journal of Community Well-Being*, Vol. 3, No. 3, pp. 361-390, Sep 2020.
- [4] 功刀祐之, 有村俊秀, 中静透, 小黒芳生. 主観的幸福度と自然資本—マイクロデータを用いた分析—. *環境科学会誌*, Vol. 30, No. 2, pp. 96-106, 2017.
- [5] Yoji Kunimitsu. Regional factors affecting the satisfaction of residents: Evidence from a structural equation model in Japan. *Social Indicators Research*, Vol. 120, No. 2, pp. 483-497, Jan 2015.
- [6] 田中里奈, 橋本禅, 星野敏, 清水夏樹, 九鬼康彰. 居住地域の特性が住民の主観的幸福度に与える影響. *農村計画学会誌*, Vol. 32, No. Special\_Issue, pp. 167-172, 2013.
- [7] 宗健, 新井優太. 住まいが主観的幸福度に与える影響. *都市住宅学*, Vol. 2018, No. 103, pp. 132-137, 2018.
- [8] Julie Butler and Margaret Kern. The perma-profiler: A brief multidimensional measure of flourishing. *International Journal of Wellbeing*, Vol. 6, No. 3, pp. 1-48, 10 2016.
- [9] Martin EP Seligman. *Flourish: A visionary new understanding of happiness and well-being*. Simon and Schuster, 2012.
- [10] 穴戸邦章, 佐々木尚之. 日本人の幸福度. *社会学評論*, Vol. 62, No. 3, pp. 336-355, 2011.
- [11] 内閣府. 生活の質に関する調査 (平成 23 年度), 2012.